

ウドは救世主

渡

辺町には、休耕地を利用してお宅がいます。もともとは食用にと親戚に分けてもらった数本のウドを、試しに休耕地に植えてみたのがはじまりだったそうです。

畑はほんの一年放置しただけで雑草が生い茂り、再び農地としてよみがえらせるのは一苦勞です。手間をかけずとも畑の養分をすってぐんぐん生長するウドは重宝され、今では出荷できるほどに増えました。

ウドは、人工的に軟白化させたものを「白ウド」、山で自生している野生のものや露地栽培で野生に近いものを「山ウド」と呼び區別しています。渡辺町のウドは後者ですが、いわき市内のウドは栽培農家は決して多くないことから、出荷できるレベルにまで品質を高めるには、長年にわたり研究を重ねてこられたようです。

農業はうまくやらないと利益が上がらない。なるべく畑を働かせて自分の手間を省くためにウドを植えただけ。

渡辺町のウドはただの大木では

なく働きのウドでした。

小

川町では子供が学校(高校)に入学する時はウドを植えろと言われており、かつてこの辺りの農家では盛んに栽培が行われていました。入進学で何かとお金のかかる春先に、ちょうど収穫時期を迎えるウドは、何かと出費の多い時節の家計を大いに助けてくれる作物として、この地でも大活躍していました。

国内でも有数の生産地、東京立川市では地下にむろと呼ばれる遮光の空間を作り厳重な温度管理のもとで軟白ウドを育てています。小川町ではこうした方法はとらず、畑の中に大きな穴を掘り、その中をもみながらや土で埋め尽くしウドの根を囲ってウドを軟白化します。

大学に行く時はウドでも間に合わなくてべこ(牛)を飼ったんだよ。笑いながら昔話をしてくれたお父さんの畑には、今年も青々としたウドの葉が広がっており、今ではすっかり家の大黒柱となった息子さんが作業を手伝っておられました。

